興味深い発言が見られた。たとえば、現在ではテヘネ村で唯一の呪術師となったSH氏（本業は農業、四二歳）は、主に人間関係に関する呪術を行なうが、妊娠祈願は自らの呪術の範囲外であるとして決して行なわないという。彼は、子を授かりたい人々にはターガに行くか神に祈ればよいと述べていた。野菜の卸売りを行なうO氏（三四歳）は、ターガを非イスラーム的慣行であると非難する一方で、イスラーム主義者の批判の対象となりうるスーフィズム（イスラーム神秘主義）には肯定的で、村にスーフィー教団のシャイフが来て集会を行なった時には嬉々として参加していた。

(27) 辻村、一九九〇年、五一―五二頁、山花、前掲論文、七一頁。

(28) 山花、前掲箇所。

(29) 川西宏幸『古墳時代の比較考古学―日本考古学の未来像をもとめて―』同成社、一九九九年、二一一頁。

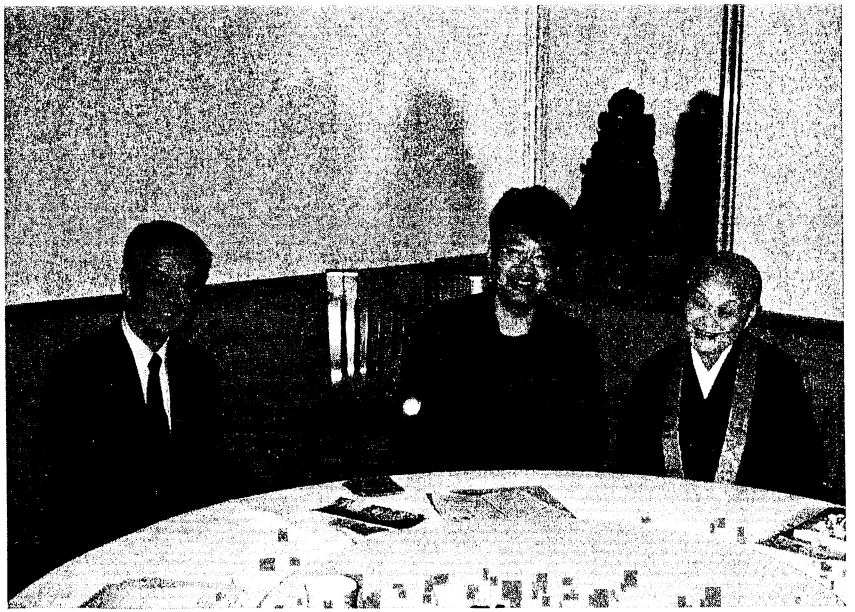
(30) 「岩は人に、人間の条件の不安定さを超越しているあるものを啓示する。すなわち絶対的な存在様態をである。石の抵抗感、その不動性、その大きさ、またその奇怪な外形などは、およそ人間的でない。それらは眩惑し、畏怖させ、魅きつけ、脅かすものが現前していることを証している。人は石の大きさ、固さ、形、色において、人間が属している俗世界とは別の世界に属する実在、力に遭遇するのである。（中略）石はその出自や形にもとづく、ある聖なる力をおびているゆえに、崇拝されたのではなく、使用されたのである。」（ミルチャ・エリアーデ〈久米博訳〉『エリアーデ著作集第二巻 豊饒と再生 宗教学概論二』せりか書房、一九七四年、一〇一―一〇二頁）。

(31) 「場所の霊性」とは池上良正の提起した概念で、「『霊威的次元numinous dimension』の力や意味が、特定の地点や方角に濃密な凝集性をもって感得されるという表現形態」であり、これはターガという場が有する、多様なものを共時的・通時的に統合するある種の力・特性を指し示す上で、極めて適切な概念であると思われる（池上良正『民間巫者信仰の研究―宗教学の視点から』未來社、一九九九年、九九頁）。

対談

仏教復興は可能か？

瀬戸内寂聴（せとうち じゃくちょう）
上田紀行（うえだ のりゆき）
〈司会〉島薗 進（しまぞの すすむ）



島薗　『現代宗教』というのは、宗教界の方、宗教に関心を持っていらっしゃる方を対象とした年に一回の雑誌ですが、今年の特集は「宗教復興の潮流」として、世界的に人心が宗教に向かっているのではないだろうか、宗教離れと言われるものが長い間続いた後に、世界中の人々が心に空虚さをおぼえだして、宗教の方にもどろうとしているのではないだろうか？　そのように見えるが、どうなんだろうか？　ということを考えてみます。その中で、日本はどうなんだろうということで、「仏教復興は可能か」という題でお願いします。

ちょうど、上田紀行さんが『がんばれ仏教！――お寺ルネサンスの時代』（NHK出版）という本をお出しになって、日本の仏教の元気な様子、元気になるかもしれない可能性を掘り出して下さっていますので、それをひとつの手がかりにしながら進めたいと思います。瀬戸内先生は、一般の方の気持ちに接しながら、日本仏教の可能性を探ってこられた方だと思いますので、そのあたりのことをお話いただけるでしょうか。まず、上田さんから『がんばれ仏教！』の説明をしていただけますか。

瀬戸内　お寺はルネッサンスしてますか（笑）。

上田　ルネッサンスしているお寺をとりあげたんですけれども（笑）。私は若いころずっと、仏教に対しては否定的だったんですね。たとえば、オウムの若者たちは、お寺とか仏教にはなにも求めていない。だから、あんな麻原のようなところに行ってしまったと言われてますけれども、私は彼らと同じ世代です。自分の中には悩みもありますし、とても生きづらいと思っている。そして、大学を出たり、そこそこ恵まれた境遇の中にいながら、なぜ生きているのかとか、なぜ私はこんなことをやっているんだろうと問い続けてきた世代なのですが、その時に、仏教に答えを求めようなどとはついぞ考えてこなかったんですね。

しかしいま周りを見回してみますと、実は今までの仏教のお寺があまりにも無力であると気がついて、そこから新たな行動を起そうという寺が次々と現われています。次々と言いましても、全体の中ではまだ少数派なんですけれども……。私がこの本の中で言いたかったのは、単に葬式仏教と言われて何もできない、無力だという全体の構図の中で、確実に動き出してきているお寺はあるんだということを紹介したかったわけです。

瀬戸内　うちには来なかったじゃないですか（笑）。

上田　申し訳ない。恐れ多くて、寂庵にはちょっといけませんでした（笑）。あとは、私と同じ世代の人たちをとりあげたかったということがありましたので。いくつかのお寺をとりあげさせていただいたんですけれども、やはりその中で私が最初に、もう一回仏教というものを捉え直して感じたことは、仏教というのは、お釈迦さんの時代から今に至るまで、時代の前衛、先端で、その時代の苦悩を引き受けてきたから命脈を保っているのであって、伝統芸能のように、昔は良かったとか、それを歪みなく伝えていくのが仏教だというのではない。その時代の縁起に生きると言いますか、そういうことが本質なんじゃないかと、お寺を見て気がつきました。

あるお寺は、その周りの死のケア、ターミナルケア、老人問題に取り組んでみたり、あるいは世界平和、難民問題に取り組んでいるところもある。ところが一方で、正統な仏教界からは、そういった難民問題とか、世界平和なんていうのは仏教と関係ないと。それは邪道であって、教えとしては低いものだと言われる傾向も……。

瀬戸内　そうでもないんじゃないかな。それはちょっと違うと思いますけど。

上田　そうですか、そうならばいいのですが。まあ、いずれにしましても、お釈迦さんというのは、バラモンという旧体制を打破して新しく出てきた方で、彼を支えたのは新興資本家たちですよね。そして仏教が日本に渡ってきてからも、聖徳太子も新しい国家像を作り上げたとてつもない前衛人だったわけですし、その後の最澄や空海も時代の前衛ですよね。しかしその仏教が比叡山に上ってしまって固定化してしまうと、それでは民衆が救われないと、法然という現代人が山を下りてくる。そして親鸞、道元、日蓮といった華々しい鎌倉仏教が生まれてくるわけです。

だとすれば日本仏教の真髄はその時代その時代における現代性なのであって、そういった前衛性を失った仏教はまさに諸行無常で力が無くなって当然なのではないか。そして、逆に考えてみれば、現代において現代の問題に